

【附録】十五年前の回憶 汪仲賢

『晨報副刊』で仲密先生が江南水師学堂の事を語っておられるのを読み、思わず十五年前の学校生活を思い出した。

仲密先生の話は、だいたい今から二十年前になる。彼はわたしの先輩で、会ったことのない同窓である。わたしが彼と違うのは、彼が“機関科”にいたのに対し、わたしは“航海科”にいたことである。

われわれは狭い校舎の上海の私立学堂での勉強に慣れていたので、水師学堂に入ったばかりの頃は多くのことが気に入らなかった。われわれより上の学生は、各人が大きな部屋を独占し、内には多くの単幅の書画が掛けてあり、卓上には花瓶や置き時計などが並べてあった。われわれ上海から行った学生はみな彼らを“新婚式の部屋”と呼んだ。

上海の私立学校で勉強していた時には、学生と教師の間は、何の身分差もなく、学生に意見があれば何でも教師に言うことができた。ところが豈知らんやそんな気楽さに慣れていたので、官立学校に入ってついに大きなペテンにかかった。われわれのクラスの学生は上海で編入試験を受けて入ったので、入学試験では数学の分数計算などの問題も出た。ところが学堂に入って、最初の日の授業に出ると、その教員はなんとわれわれに 1 2 3 4 と十のアラビア数字を教えるのだ。立て続けに三日経ってもまだ終わらない。わたしは我慢しきれず、その教員に一言言った。“わたしたちはとっくにこんなものは習っています。どうして又時間を潰す必要があるのですか。”これがその教師の怒りを買って、たちまち仏頂面でわたしを怒鳴りつけ、そして言った。“お前がこんなに楯突くなら、明日校長に申し上げ、退学させる！”わたしは彼がほんとうに退学させるのかと恐れて、すぐに部屋に戻り布団を丸めて上海に逃げ帰った。二カ月のち、同級生が手紙で、あの教員はもう馘になったと教えてくれたので、わたしはようやく勉強に戻った。

もう一人漢文を教える老先生がわれわれに教えてくれた。“地球は二つあり、一つは自動で、一つは被動、一つは東半球と言い、一つは西半球と言う”と。その時わたしは除籍を恐れてもう彼には抗弁はしなかった。われわれが住んでいた部屋の入り口の敷居はみな踏み潰されて筆置きのような山形になり、床板にはあばたのような焦げ跡があった。ともに先輩たちが学堂に残した生活の痕跡であった。

構内では機関科と航海科の学生の間隔はととてもひどく、ふだんはほとんど往来しない。わたしは学校に四年あまりいたが、機関科に行ったのは十回に満たない。水師学堂の歴史に詳しい人の言うところでは、以前両科の学生は互いに敵視しあい、しょっちゅう決闘が起こった。一度など最大の械斗があり、雨天体操場とマストの網あたりを戦場とし、双方に多くの負傷者が出た。学堂の校長も阻止の方法がなく、学生に向かってため息をつくばかりだったということである。仲密先生が学堂におられた頃には、こうした事件を経験されたのであろうか。

われわれ航海科の長方形の中庭には、四つの煉瓦を畳んだ花台があり、それぞれに蠟梅が一株植えてあった。蠟梅の花が咲くのを見ては、学年試験の準備をしなければならぬのを知るの

だった。試験が終わって家に帰るのは、蠟梅の真っ盛りの頃で、明るく年学校で授業が始まって、まだ何日かは残香を嗅ぐことができた。この四株の蠟梅の色香は、航海科の学生だけが独り占めでき、機関科にいる同学は享受の権利がなかった。

学堂では毎日午前と午後にそれぞれ二教課で、午前十時に十分の休憩があるだけだった。朝大椀で二三杯のお粥を食べ、十時に授業が終わると、往々にしてお腹がぐーぐーなる。小使に学堂の入り口まで行って銅貨二枚の山東焼餅、銅貨一枚のごま油のラー油と酢を買わせ、焼餅につけて食べると、香ばしく辛く酸っぱくそして飢えを充せて、ほんとうに山海の珍味よりもまだ旨い。

仲密先生が言う老夜回りには、わたしも会ったことがある。彼は相変わらず健康で、相変わらず人に長毛の話をするのが好きだった。深夜彼が関帝廟に出入りして時を告げるので、何人か小さい学生は、とても彼の肝っ玉が太いのに敬服して、よく彼に訊いた。“幽鬼に遇ったことある？”彼は生涯に一度だけ食堂のそばで黒い影を見たことがあると言った。又怪を見てみても怪となさざれば、その怪自から退く。だから夜回りしても幽鬼など怖くはないのだとも言った。わたしがいた部屋は航海科の東9号で、窓の外に廊下はなく、彼もいつもは航海科に入ってこなかったもので、毎日彼に会ったわけではなく、彼に対する感情も仲密先生ほどには深くはない。

幼い頃から都会で育ったので、南京に来て学校の後ろ一帯が小山なのをみて、ずいぶん喜んだ。生活に厭きが来た時には、口実を設けて休みを取り、独り小山に散歩に行った。機嫌のよい時には、山を越え嶺を越えてそのまま清涼山まで行って戻って来ることができた。ある時やはり自分一人だったが、小山の天辺の栗の樹の林までかけて行ってたっぷり午睡をし、醒めて下山して、ある白壁に一枚“通行人に警告す”という貼紙があるのを見つけた。当山内に最近一頭大きな狼が出て、常時白昼出てきて人を傷つく……と言うのである。わたしはそれを見て全身冷や汗が出、以後は独りでは山によろ入らなくなった。

われわれが学堂を出る前になった頃、魚雷堂に行って三週間の講義をノートしたことがある。われわれの傍にはいくつかの本物の魚雷が並べてあり、手のひらにたくさん Torpedo という字句を書いた。しかし教師も学生も一言も物を言わなかったもので、手のひらに書かれたものと座席のそばに並べてあるのが結局どんな関係にあるのか、実を言うとわたしには今もって少しも分からないのである。仲密先生が今でも“白頭魚雷”などの名詞を覚えておられるのは、先輩方がわれわれよりもずっと聡明だったことが分かる。わたしはずっと白頭魚雷がどんなものか知らないのだから。

“君は海軍の出身だろう、黄浦江に飛び込んだって溺れ死するはずはないだろう。” こういう質問に会うのは、いちばん頭が痛い。仕方がないので、次の二つの話で彼らに答えるしかない。新聞社の飯を食う人は誰もが文選ぶんせんができるとは限らない。芝居で飯を食う梅蘭芳が必ずしも真剣真銃が打てるとは限らない。“南京水師”出身の学生が泳げないのは、おそらくプールで溺れ死んだ小さな先輩の影響を受けたのだろう、と。

（『時事新報』「青光」欄を録す）